

日本銀行旧京都支店

中村茂樹 日本銀行文書局技師

千年の古都であり、明治期以降いち早く近代化を進めた京都市には、第二次世界大戦の戦災被害を免れた数少ない都市として多くの歴史的建造物が今に残っています。赤レンガの日本銀行旧京都支店もそのひとつです。第四回は、そんな旧京都支店の建物を紹介します。

京都出張所の開設から 三条高倉へ

江戸時代末期に政治の中心として栄えた京都は、幕末の争いの中で街の中心がほとんど焼失し、さらに明治二年（一八六九）に天皇が東京に移ると人口が急減し、産業も衰退し始めました。そのため、京都市民などから産業の

振興を呼びかける声上がり、横村正直京都府知事（注1）の強力な実行力により勤業政策が推進されました。明治二十三年（一八九〇）に琵琶湖からの疎水工事が完成し、発電、電気

鉄道、水道の三大事業が相次いで興り、明治二十八年（一八九五）には東京以外の地で初めて内国勤業博覧会（注2）が開催されるなど、京都の経済と文化の復興再生が大きく動き始めました。これにつれて資金の動きも活発化し、地元からの強い要望もあって、日本銀行は京都出張所を開設することになります。

初代の出張所建物として、上京区（現・中京区）東洞院通御池上ルの民家を購入し、明治二十七年（一八九四）四月に開設しました。（写真1）出張所とはいえ三〇名程度の人員を



上・現在の外観
左・新築時の外観
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）



擁し、貸出業務までおこなっていたので、実質的には支店と変わりませんでした。

業務の伸長に伴い、営業場等を順次増築したものの、民家の改造では営業

上の不便が多くなったため、下京区（現・中京区）三条高倉西入ルに営業所を新築することになります。（図1）

写真1 初代京都出張所



（注1）横村正直
第二代京都府知事（明治八年（一八七五）～明治十四年（一八八二））。山本實馬ら有識者を重用し、文明開化政策をすすめる。わが国初の小学校のほか、舎密局（化学の実験・教育機関）、女紅場（女子に対して読み書きや裁縫を授けた教育機関）、外国語学校等を設立。勤業政策は第三代の北垣国道（明治十四年（一八八二）～明治二十五年（一八九二））に引き継がれた。

（注2）内国勤業博覧会
平安遷都千百年記念祭に合わせて開催された国内で四回目の勤業博覧会。



写真2 辰野金吾

明治12年(1879)工部大学校(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を第1回生として卒業。近代日本建築界の先覚者。日本銀行建築顧問。日本銀行本店本館のほか、東京駅など明治大正期の日本を代表する建築物を数多く手掛けた。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真3 長野宇平治

明治26年(1893)帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。日本銀行技師長。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店を始めとする数多くの銀行建築を手掛けた。(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



図1 (歴代京都支店の所在地)

「辰野式」の誕生

二代目の京都出張所の設計は、大阪支店に引き続き辰野金吾(写真2)と長野宇平治(写真3)に委ねられました。辰野は日本銀行建築工事監督として本店本館(明治二十九年「二八九六完成」と西部支店(注3)の建築に専念した後、明治三十一年(一八九八)から日本建築学会会長と帝国大学工科大学長に就任して以後、日本建築界の発

展に精力的に関わり、大阪支店ほかの日本銀行建物の建築は、建築工事顧問として関わる形になっていました。明治三十五年(一九〇二)には一六年間務めた工科大学を辞して、五〇歳の誕生日を前に、東京(辰野葛西事務所・明治三十六年「一九〇三」開設)と大阪(辰野片岡事務所・明治三十八年「一九〇五」開設)に自らの設計事務所を開設します。

辰野の設計した二〇〇件を超える建物のうち、東京駅(写真4)を始めとする大半の設計がここから始まります。

建物のデザインもこれまでとは一変して、赤レンガの外壁に白い花崗岩(注4)の横帯を装飾的に配するいわゆる「辰野式」(注4)デザインが生まれます。

京都出張所はまさにこの「辰野式」のスタート時の作品でした。

辰野とコンビとなった長野は、新たな「辰野式」デザインに戸惑いを見せ



写真4 東京駅

つつも、師から学んだ古典様式を加味させながら銀行建物に仕上げました。

明治三十六年(一九〇三)九月に着工した工事は、日露戦争に伴う鋼材輸入の途絶等から工期の遅延を強いられ、一八万余円の工費を費やし、明治三十九年(一九〇六)六月に完成しました。

後に「辰野式」と呼ばれることとなる赤レンガの優雅な姿に市民は目を見張りました。

出張所から支店へ

新築時の京都出張所は本館、金庫および機械室・宿直室等の付属家(注5)で構成され、本館と金庫は渡り廊下で接続されています。(図2)(写真5・6)

三条通に面した本館は、レンガ造

(注3) 西部支店

明治二十六年(一八九三)、大阪に次ぐ全国で二番目の支店として赤間関市(現下関市)に開設し、明治三十年(一八九七)、門司市(現北九州市)に日本銀行で最初の支店建物として新築移転。現北九州支店の前身。

(注4) 辰野式

英国のウィクトリアン・ゴシックに影響を受け、辰野が得意としたゴシックとクラシックの折衷様式(フリースタイル)。明治から大正にかけて多くの建築家が模倣。

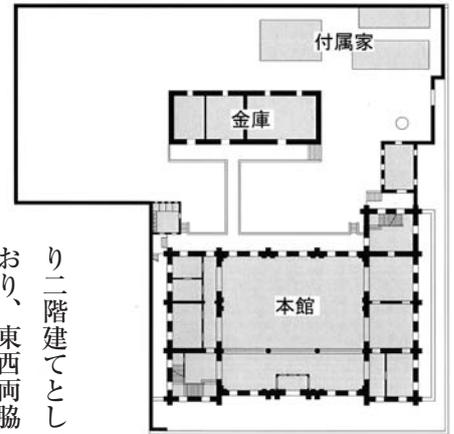
写真6 新築時の裏側（北側）外観



写真5 新築時の金庫風景
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



図2 (新築時の京都出張所の平面図)



り二階建てとしており、東西両脇の塔屋等を左右対称に配置しています。赤レンガの外壁に北木島産の白い花崗岩の横帯を装飾的に配した「辰野式」の外観が特徴です。

スレート葺の屋根は、松材による木造小屋組みで支えられ、中央の吹き抜け部分には、客溜との境の二本の独立柱と上部の桁(注5)に鉄骨材を用いて、柱の広い営業場を設けています。(写真7)

また、営業場の天井にはガラス窓が組み込まれ、屋根に配されたドーマ窓(注6)から営業場と客溜に自然光を取り込んでいました。(写真8・9)

郵便局や金融機関の建物が立ち並ぶ三条通の中で、「赤レンガ」の愛称で親しまれた京都出張所は、府内の小学生の修学旅行の見学コースにも加えられたほどでした。

実質的に支店業務を行っていた出張所は、明治四十四年(一九一二年)六月、京都支店に改称されます。

双子の京都支店と名古屋支店
旧京都支店は旧名古屋支店と双子の建物と言われるほど類似していました。(写真10)

名古屋支店は京都出張所開設の三年後となる明治三十年(一八九七年)三月に開設されました。その後両者の新店舗の建築が同時期に計画され、設計は同じく辰野と長野のコンビで、着工が明治三十六年(一九〇三年)九月、完成が明治三十九年(一九〇六年)六月と、京都と名古屋の新築工事が同時に進行しました。このため地鎮祭や完成披露式はあえて四日ずらすことにより、関係者の列席に対応しました。

スレート葺の屋根と赤レンガに白い花崗岩の横帯を配した「辰野式」の外観もほぼ同一で、塔屋等の屋根周りに多少の差異があるだけでした。

名古屋市中心部の栄に建ち、京都と同様に「赤レンガ」として地元市民から親しまれた旧名古屋支店は昭和二十年(一九四五)三月の空襲により焼失しました。双子の建物が共に現存していればと惜しまれます。

客溜は、営業場の天井にはガラス窓が組み込まれ、屋根に配されたドーマ窓(注6)から営業場と客溜に自然光を取り込んでいました。(写真8・9)



写真8 新築時の営業場風景
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真7 新築時の客溜風景
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真9 屋根に設けられたドーマ窓
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)



写真 11 現在の京都支店



写真 10 明治期の名古屋支店
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

文化施設としての 保存・活用

一方、京都支店は戦後の業務の拡大にあわせ、昭和二十三年（一九四八）に金庫と付属家、昭和二十五年（一九五〇）に監査室を増築して対応したものの、建物設備の老朽化が著しく、さらに支店の周辺の道路が狭く取引先の自動車および現金輸送用貨物車の出入りに困難をきたし業務面に支障が出てきたため、昭和三十八年（一九六三）七月、適地を求めて新築を行うことになりました。

新築用地として、市の中心地となる河原町通二条に所在する旧織殿（注7）跡地を購入し、昭和三十九年



写真 12 京都文化博物館別館 1F ホール

（一九六四）三月に工事に着手、昭和四十年（一九六五）九月には新営業所が完成し、同十月に移転しました。（写真11）

旧営業所の土地建物は銀行としての役割を終え、昭和四十二年（一九六七）四月、財団法人古代学協会に売却され、翌年の昭和四十三年（一九六八）五月に平安博物館（注8）として開館しました。

さらに、昭和四十四年（一九六九）三月には、明治期の典型的な洋風建築として国の重要文化財に指定されました。

その後、昭和六十一年（一九八六）四月に至り、古代学協会から京都府に寄贈され、京都の歴史と文化を紹介す

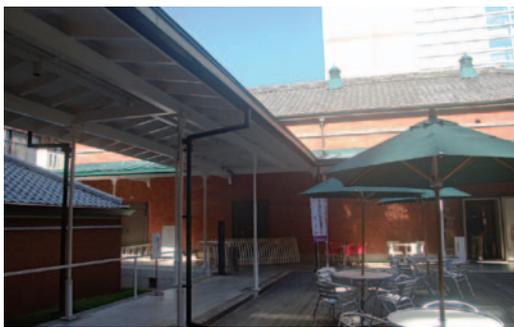


写真 13 京都文化博物館内の旧金庫

る施設として活用されることとなりました。京都府教育委員会により創建当初の姿に修理・復元され、昭和六十三年（一九八八）十月から京都府京都文化博物館（注9）別館として公開されました。

現在は、平成十七年（二〇〇五）五月のリニューアル工事を経て、本館の旧営業場を博物館別館ホールとして演劇会や講演会に利用し、金庫も喫茶室として活用されています。（写真12・13）

建物の前を東西に延びる三条通は、江戸時代には東海道の西の起点として交通・物流の要所であり旅籠や両替商などが立地し、明治期には都市的機能が強化され、郵便局、銀行、保険会社などが立ち並ぶ近代京都の中心地でしたが、明治四十五年（一九一二）に近接する四条通と烏丸通が拡張されるとそのにぎわいは他に移りました。

それがかえって多くの歴史的建造物を残すこととなり、現在、三条通の新町通から寺町通の一带は京都市の「界わい景観整備地区」（注10）に指定されています。

旧京都支店建物が、三条通の景観の一部として、建造物の文化的価値を維持しつつ、保存・活用されることを期待しています。

（注7）織殿

明治七年（一八七四）に開設された官営の織物技術の研究・教育機関。染殿（染色技術の研究・教育機関）、舎密局とともに明治時代における京都勲業施策の原動力となった。

（注8）平安博物館

古代学協会が運営していた平安時代を中心とした古代史の研究博物館。京都府京都文化博物館の開館に協力し同博物館に移管された。

（注9）京都府京都文化博物館

京都の歴史と文化の紹介を目的とし平安建都二〇〇年記念事業として創立された。

（注10）界わい景観整備地区

京都市市街地景観整備条例に基づき、個性的な地域景観を守る目的の地区制度。三条通は明治の文明開化の面影を今に伝える界わいとして平成九年（一九九七）に指定。